

異色のシステムが勢揃いした自作マニアの祭典

European Triode Festival 2004

2004年12月2～5日 ドイツ・ランゲナーゲン

レポート：内田 満

昨年、ドイツのランゲナーゲン(Langenargen)で開催された「ヨーロッパ・トライオード・フェスティバル 2004」に参加することができた。会は、真空管アンプやスピーカークラフトに関心のある自作派仲間(専門家も含む)による作品発表、アイデアや経験・知識といった情報交換の場であり、毎年開催されて今回で5回目を迎える。

スイス、オーストリア、ドイツの国境に位置するボーデン湖(琵琶湖の2/3ほどの大きさ)のほとり、会場のリゾート施設“Familienferiendorf”へは、チューリヒから電車を乗り継いでいく鉄道の旅を選んだ。ところが、運行のタイミングが悪かったため、最寄り駅のホームへ降り立つ頃にはあたりはすっか



会場のFamilienferiendorf。ボーデン湖畔、閑静な別荘地の一角にあるファミリー向けのリゾート施設

イベントの中心となった事務所棟。中には食堂、喫茶室だけでなく大小いくつもの部屋があり、今回のような規模の催しには十分な広さがある



初日のセッティング風景。このように両サイドをそのままエンクロージャーに仕立て上げてしまった部屋もある。これだけ大掛かりな作業を軽くこなしつつ、まるで違和感なく収めているところがすごい!



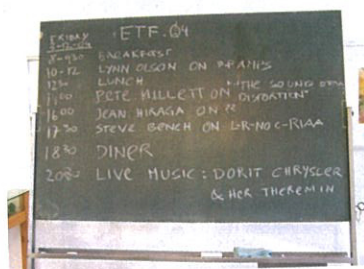
会場にほど近いボーデン湖の冬景色。ドイツ南端にあり、別名コンスタンツ湖とも呼ばれる

り暗くなり、ついには小雨まで降ってきてしまった。焦る気持ちを抑え、タクシーに乗り込み会場へと急ぐ。

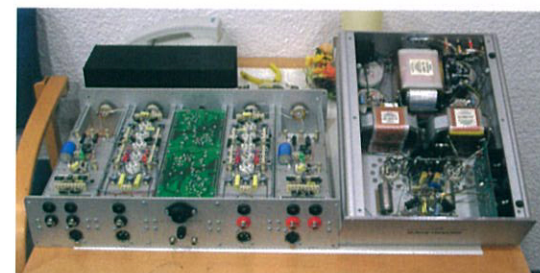
ようやく到着したものの、コテージの散在する敷地内は広く、灯りもまばらで、にわかに肌寒さを感じて心配になってきてしまった。恐る恐る歩を進め、しばらくすると事務所らしき建物にたどり着き、安堵と不安の入り交じるなかガラス戸を押しあけ中へと進んだ。すると、隣の部屋ではいくつかのテーブルを囲んで大勢で何やら盛り上がりつつある様子が見えるではないか。どうやら参加者を集めた夕食のようである。「チャオ!?!」「ボンジュール!?!」いや「グーテンターク!?!」...どう挨拶すればよいものかと立ち尽くしていると、イベントのオーガナイザー、Christian Rintelen氏がていねいな英語を交え温かく出迎えてくれた。このイベントにおける公用語は英語だったのである。

本イベントは実は一般公開していない。参加者のほとんどはインターネット上のフォーラムでお互いを知る間柄で、年齢的には30～50代といった具合である。国ではドイツ、フランス、イタリアなどのヨーロッパ諸国だけでなく、なんとアメリカからやってくる常連もいるらしい。そういう意味では年に一度の世界規模のオフ会といえるかもしれない。

開催期間は4日間だが、初日と最終日は搬入・搬出、セッティング準備などにあてるため、実質2日



レクチャーが主体となった2日目のタイムスケジュール。ご覧のとおり、朝食から夜のライブ演奏までびっしりと埋まっている



左はフォノイコライザーだが、シャーシの構造がおもしろい。前後のパネル間を10本の鉄支柱(?)で支え、中央に電源基板、その左右に各チャンネル増幅部を配置した構造。右はKT88と思われるパワーアンプの内部。シャーシ内に出力トランスを収容している



メッシュプレート中国製ナス型300Bを使用したシングルステレオパワーアンプ。トランス類はいずれもケース入りだが、見慣れない色と形でブランド名の記載がどこにもない。これもお手製のケースでは?



一見して、ピックアップのメカ部を除きすべて自作とわかるCDプレーヤー。送り出しに真空管バッファを装備しているようだが、これだけの回路をよくシャーシ内に収めたものだと感じる

European Triode Festival 2004

テーブル2台では収まりきらず、一部を床置きするほど大掛かりな真空管アンプシステム。パワーアンプ、ラインアンプなど、ここまで製作するのにどのくらいかかったか聞いたところ、お金も時間も費やしすぎて説明すらできない状態だという。いやはや自作もここまでくると空恐ろしい...



こちらヨーロッパでも定評のサン・オーディオ製SV-2A3 (2A3 シングルスステレオアンプ) は、左右に置かれた参加者の自作スピーカーシステムの音出しに使用されていた

大柄なPCケースほどのアルミシャーシによくここまでびっしりパーツを詰め込んだ211 (845?) パワーアンプ。中央に鎮座する巨大な円筒の正体は50μF/2000VDC (!)。やはり高耐圧のオイルコンデンサーであった



右側は真空管を多用したD/Aコンバーターとわかったが、左もどうやらD/Aコンバーター試作品のよう。残念ながら製作者がそばにいないので、詳細を突き止めるまでには至らなかった



重厚感たっぷりのアナログプレーヤー。部材からの削り出し加工によるターンテーブルとアームベースが目玉。人造石のベースを使い、木製トーンアームも装着されており、そのすべてに並々ならぬ情熱が注ぎ込まれていると想像がつく



日本製TADのドライバーから先はすべてお手製となる大輪の円形ホーンを使った2ウェイシステム。ホーンこればかりに目がいってしまうが、よく見るとその支持は、硬式テニスボール3個を介したインシュレーター構造になっている！

間ということになる。会場は事務所の地下や2階の各部屋を利用してあり、作品の展示や音出し、ゲストを迎えたレクチャー、オークションやバンドによる生演奏、さらに通路ではフリーマーケットも行われるといった濃い内容にもかかわらず、その間の参加費はコテージ宿泊費と食事代込みでたったの200ユーロ(約27,000円)というのだから驚きである。しかしそれだけでなく、例年参加人数を多すぎず少な過ぎずといった80人までと限定し、一貫して友好



壁にかけられたこのスピーカー。単なる平面バツフル型かと思いきや、後ろはスパイラル構造のバックロードホーンになっている。ちなみに、ユニットはフォステクス製で、左上がホーンの開口部



一目でコンデンサー型スピーカーとわかるが、これだけではやめられないのが自作派というもの。写真ではわかりづらいが、下部はウーファーを仕込んだエンクロージャーと合体する独特の2ウェイ構造



思わず「目玉のおやじスピーカー」と命名したくなる、球状の陶器エンクロージャーのフルレンジ(上)や、下のバックロード型トールボーイのように、ユニット外周に合成樹脂製の皿(?)を両面粘着テープで固定した個性的システムもある

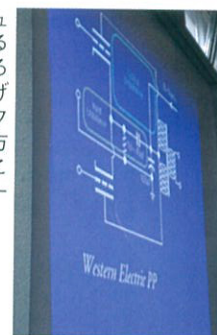
的で小回りのきく運営を行う徹底ぶりである。これは、オーガナイザーの手腕と情熱によるところが大きいだろう。

今回は個人的な都合により、2日間だけの参加となるため、残念ながらそのすべてを味わうことはできなかったが、足早に準備風景やレクチャー、作品群を観てまわるうち、ちょっとしたハプニングに出くわした。それは本誌の愛読者(EU代表の方?)に、製作記事をはじめ内容がすばらしいので、ぜひとも英語翻訳版が欲しいと懇願されてしまったのである(どうやら本誌の編集者と勘違いしている模様…。それにしても本誌の人気は絶大だ)。この人が特別な

エンクロージャーに収まっているユニットはもしや…と思って近付いてみると、やはり予感的中。一度見たら忘れないエッジレスの独特な作り、それはまさしくグッドマンのAXIOM80であった。テーブル左端はソニーのベルトドライブプレーヤーのようだ



テーマのブッシュ回路に関する説明は、いろいろな回路を取り上げて順次プロジェクトで映し出す方法で行われた。これはそのうちのひとつ、WEの回路



通路脇のテーブルはご覧のとおりフリーマーケット状態。アンプやスピーカーユニットはともかく、中には巨大なオープンデッキや測定器までも平然と並べられている

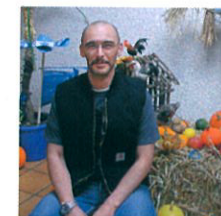
ブッシュ回路に関するレクチャーを行い、ゲストとして参加されたアメリカ「VACUUM TUBE VALLEY」誌のLynn Olson氏(右)とその補佐を務めたJohn Atwood氏(左)



白箱入りからソヴエックやウエスティングハウスなどの元箱入りまで、大量のMT管が並ぶ。値札を見ると左の入れ物には一本5ユーロ、右は1ユーロとある(1ユーロ=135円)



真空管やコンデンサーといったパーツ類が数多く並ぶ一角で使える掘り出し物を探そう。イタリアBartolucci製の角型ケース入りトランス(左上)を発見した！



前回に引き続き今回もフェスティバルのオーガナイザーを務めるChristian Rintelen氏。自身は隣国スイスからの参加である



こちらは専門家の参加者。左よりフランス「REVUE DU SON」誌のジャン平賀氏、ドイツJAC-MusicのJac van de Walle氏、日本から和光テクニカルの大和国裕氏とサン・オーディオの内田昌徳氏

* European Triode Festivalの公式Webサイト
http://triodefestival.net